絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践
～[絵本『はらぺこあおむし』の世界を楽しむ]～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
大村いちか・小関理緒奈・島田朱花・
下津浦歌菜・髙橋侑加・滝川あかり・
田尻結唯・壇葵・原田莉々子・麓あかり・
宮﨑菜々美・吉武Ｍ

題材とした絵本：『はらぺこあおむし』　文：エリック・カール　絵：　エリック・カール
出版：偕成社（1976年5月初版・2006年8月改訂397刷）

タイトル：「はらぺこあおむし」

実践準備の担当：台本・脚本（高橋侑加・壇葵・原田莉々子・宮﨑菜々美)、小道具・衣装（大村いちか・下津浦歌菜・田尻結唯）、音楽（麓あかり）、記録・報告書（島田朱花・滝川あかり・田尻結唯）、会計(吉武Ｍ)

実践時の担当：導入・まとめ（下津浦歌菜・滝川あかり・壇葵）、劇（高橋侑加・原田莉々子・宮崎菜々美）、体験（小関理緒奈・島田朱花・吉武Ｍ）、ナレーション（原田莉々子）、音・演奏（麓あかり）、カメラ・音響（大村いちか・田尻結唯）

1. 題材「はらぺこあおむし」選定の理由

　絵本選定にあたり①リモートという離れた環境であっても子ども達がイメージを膨らませながら絵本の世界に没入できること②実体験できることを大切にした。
①子ども達が日頃興味を持っていることであれば生活の中で実際に体験したことを思い浮かべながら絵本の世界を味わえるのではないかと考えた。保育実習の際、子ども達が虫を探したり触ったり観察したりする姿がよく見られたので興味を持ちやすく、また理解しやすいのではないかということで虫を題材とした絵本を探した。
その中でも『はらぺこあおむし』は虫の成長過程をテーマにしており、「自分の好きな虫はどんな風に育つのだろう？」「後でダンゴムシの食べている姿を探してみよう」等、子どもたち自身が好きな虫や身近な虫と照らし合わせながら内容を味わうことができると考えた。
１度は読んだことのある子どももいると考えられる絵本であるが、5歳児の発達段階を考えると自分自身やその周りの環境に目を向けることができる年齢になっていると考えられ、その時期に再び読むことで、絵本に込められた食と生命の尊さや、作者の色とりどりの世界観を味わえるような遊びが提案できると思った。
また、小さなあおむしが大きな蝶々になるという成長過程は、もうすぐ小学生になる子ども達自身に大きくなることや成長することへの喜びや希望を感じてほしいとの願いもあった。
②テレビのような一方的なやりとりではなく子ども達が実際に体験をしたり学生と対話をしたりしながら共に遊びを完成させたいということになった。そのため、どのようなやりとりや体験であれば子ども達と共に楽しめるかを考える中で、『はらぺこあおむし』の絵本に出てくる蝶々を子ども達と一緒に作ることはできないかという案が出た。だから、絵本を選定する前に実際に子ども達と一緒に出来るかどうか蝶々のちぎり絵を作ってみた。その中で、この活動だったらリモートという間接的な関わりでも一緒に活動が出来るのではないかと判断し選定した。

（執筆者：吉武Ｍ）

2.絵本の世界から遊びへの展開

　絵本の内容を遊びへと展開するにあたり、園でも遊べる内容であれば、これから子ども達が絵本に触れた際に自ら物語を遊びへと発展させていくきっかけにもなるかもしれないと考えた。
　そこでこれまでの実習経験や身近にいる子ども達(5歳児)の様子を振り返りながら①遊びのテーマと②遊びの内容について考えることにした。

①子どもの興味のあるテーマを探るために、読み聞かせの様子や休み時間に読んでいた本の内容を振り返った。するとクイズ形式の本を読みながら友達同士で問題を出し合う姿や虫や花の解説がついた図鑑を読む姿が挙げられた。このことから、対象である5歳児は「どうしてそうなっているのか？」と疑問をもつことや「こういう理由かもしれない」と仮説を立てて確認してみる、ということが積極的に行われているとわかった。その特徴を生かし、遊びの展開は子どもが疑問をもち、学生と一緒に考えながら答えを探していくような活動にすることを重視した。絵本の主人公であるあおむしの成長には欠かせない『食』を今回のテーマにし、「何を食べて成長しているのか」「体はどのように出来ているのか」を学生と子どもが一緒に考えながら遊べる内容にすることにした。

②次に遊びの内容について、子どもによく見られる遊びを振り返りながら子どもの実体験の部分を考えた。

遊びの中で見られる姿として、ごっこ遊びと製作遊びの大きく２つが挙げられた。テーマである食と関連付けた遊びの案を出し、学生同士で実践しながら内容を決めていった。初めは、あおむしごっこを行なった。絵本に出てくるあおむしの動きを身体で表現して遊んだ。匍匐前進で床を這いつくばったり、蝶々のようにひらひらと腕を動かしたりしながら絵本に登場する様々な動きを真似た。しかし、これではあおむしの気持ちや動きは想像できるが、何を食べているのかといった疑問は持ちにくく、食と成長という内容の広がりを持たせることが難しかった。

そこでもう一つの案である製作活動を中心に食と関連付けた遊びが提案できないか検討した。製作内容に取り入れたい要素として、学生と子どもが交流できるという環境と、保育の5領域人間関係『友達と一緒に活動する中で、共通の目的を見いだし、協力して物事をやり遂げようとする気持ちを持つ。』という発達の特徴があった。これらのことから、複数人で仕上げられる製作物が適していると考えた。限られた時間の中で学生と子どもが遠隔でも一緒に取り組むことができ、子どもの自由な表現も確保できる貼り絵の遊びをしてみることにした。

実際に取り組んでみると、製作の過程で色とりどりの折り紙をちぎったり、役割を分担したりと色合いのバランスを話し合う姿が見受けられた。また、完成した蝶々は絵本の特徴の一つである色鮮やかさを表現することができたため、貼り絵を本番の実践内容として採用することにした。(写真参照)

折り紙を食べ物に見立てながら蝶々の身体を作ることで、食べたものが体を作っていることを実感しつつ、自分の食生活や身近にある食べ物についても振り返る機会になってほしいという願いを込めた。

（執筆者：島田朱花）

3.実践に際して大切にしたこと

　まず、食べたもので体ができていることを体験してほしいと考えた。そのためにどうするとより、子どもにそのことが伝わるのかグループで話し合い工夫した。最初の二匹のあおむしがそれぞれに食べ物を食べていく場面では、風船を使用してあおむしが食べるごとに体に見立てた風船をくっつけて、体が大きくなるようにし多くの食べ物のおかげで大きくなれることを現した。プレ幼教こども劇場では風船を貼りながらセリフを言い、子どもと会話することを二人で担当した。しかし、それでは子どもの反応をみるまでの余裕がなかった。子どもが考えて言葉にすることが不十分になると考えた。そのまま風船を用意をしながらあおむしの言葉を言う役割、風船を繋げ支える役割、ナレーターとして子どもと対話しながら、子どもが答えてくれた食べ物をあおむしに「〇〇食べる？」と聞く役割に分担した。また、プレでの子どもの様子を録画したものを見るとお尻から食べると言っている子どもがいた。役割分担することで、あおむしが食べているように風船を運ぶことにも意識を向けることができた。風貼り絵の場面ではあおむしが食べた果物の色と同じ色の折り紙をちぎり、その色の折り紙を果物のイラストを貼った箱に入れて果物ごとに分けて園に送り実践した。本番の１日目では果物そのものの形に画用紙をあらかじめ切ったものを送った方が、完成した時に食べたものから体が作られていることがわかるのではないかという思いで、果物の形に切ったものそのまま貼ることにした。反省会をする中で2日目は子どもの人数が多かったこともあり、1日目と同様のものを千切って貼ることにした。子どもにこのことを伝える時にちぎる動作の時に「もぐもぐ」「あむあむ」などと言い、体の中で消化されて栄養になっていることも伝わるように工夫した。

(執筆者：原田莉々子)

4.内容について

（1）　全体の構成

　大きく4つの流れで構成される。１導入 ２あおむしの食生活 ３蝶々になるための実践 4まとめ

1.導入
　第1章ではあおむしの登場がテーマだ。最初に子どもが『はらぺこあおむし』の物語を知っているかどうかを問いかける。『はらぺこあおむし』の世界にやってきたという設定で今回の実践の主役となる2匹のあおむしが舞台のどこかに隠れ過ごしており、太陽の光が差す所や葉っぱの裏など子どもと学生が対話しながら探すところから始まる。隠れていた2匹のあおむしはお腹を空かせており、どんなものが食べたいのか問いかける。

2.あおむしの食生活
　お腹を空かせた2匹のあおむしがどんなものを1週間のうちに食べているのか紹介することが2章のテーマだ。
1匹ずつのあおむしの食生活に焦点があてられる。1匹目は月曜日から金曜日の間に何を食べているのか『はらぺこあおむしのうた』を歌いながらあおむしは果物を食べお腹を満たす。『はらぺこあおむしのうた』はあおむしが食べるフルーツの数に合わせて歌詞を変更した。あおむしが食べるフルーツの数はわかりやすいように一日にひとつずつとしてある。
次に現れた2匹目のあおむしは、お肉やアイスクリーム等1匹目に比べて栄養が偏った食生活を送る。子どもに何を食べさせたら良いか問いかけるも、あおむしは拒否して茶色い食べ物だけを食べる。
　1週間別々の食べ物を食べたあおむし達。土曜日になるとお腹を壊し、葉っぱを食べてお腹を癒す。

3.蝶々になるための実践
　第3章では子どもと蝶々を作成する実践がテーマだ。
食べ物をたくさん食べたあおむしは回復した後に蛹になる。子どもに蛹の後に何になるか問いかけながら蝶々へと成長する様子を紹介する。
　1匹(2匹)の蝶々と食べ物の形に切った画用紙を画面の向こうにいる子ども達に送り、蝶々の成長　のお手伝いと称して蝶々の模造紙に食べ物の画用紙を貼ってもらう。その間子どもたちに言葉かけを行いながら、学生も茶色の食べ物を食べた蝶々を仕上げる。
　食べ物がどのように体を構成していくのか、子ども達に蝶々の模様をイメージしながら果物を貼り付けていってもらう。その中で食べ物により腸がどのように成長するのか感じてもらう。

4.まとめ
　第4章では学生が作った蝶々と子ども達が作った蝶々の色合いの違いを見て食べ物が体を構成することを知ってもらうことがテーマだ。
　蝶々の仕上がりが変わった理由を子どもと考えながら子どもたち自身の食生活について一緒に振り返る。

（執筆者：下津浦歌菜）

（2）　子どもたちとの対話について

子ども達との対話について大切にした事は、①「子ども達が答えやすい質問」②「子ども一人一人が違う意見を言えるような質問」にすることを意識して対話に取り入れた。①の例えでは「～知ってる？」等の答えが限られた質問にする事で、子ども達が「知ってるー」「知らないー」等の限られた答えが言えるように工夫した。②の例えとして、「あおむしは何を食べると思う？」の質問では、子ども達は「飴」「ハンバーグ」等と言っていた。その時の子ども達の答えを受けて、こちらの返答を変えるといった対応をし、子どもの興味を引き出すことを意識した。また、「はらぺこあおむしの歌」を一緒に歌う事で、はらぺこあおむしの世界観に入り込めるような形を取り入れた。子ども達の返答が、私達が想定していなかった答えだった場合は、「良いね～」等の肯定的な言葉掛けをする。といった対話を行った。子ども達が自分たちの行う活動に対して、興味を示してくれた事により、対話が上手くいき、楽しい時間を過ごせたと考える。

（執筆者：髙橋侑加）

（3）表現の工夫

あおむしから蝶々に変化するまでの成長過程を描いた物語。シンプルな物語であるので道具の材料も絵本に描かれてある物をより近くイメージしたものが必要な物だと考え、道具を製作した。製作した道具を「このタイミングで準備しよう」「あおむしの体全体を注目させたいからカメラ引き目で」「この場面は学生も映った方がいい」と練習を重ねながら物語の構成、演出をグループ内で意見を出し合いながら行っていった。そして迎えたプレ幼教子ども劇場を通して気になったのは風船を繋げ、あおむしの成長過程を表現するという場面だ。あおむしが食べ物を食べ、大きくなっていく際にはその様子が分かるようあおむし全体が映るようにカメラを調整した。しかし「今何をあおむしが食べたのか」「あおむしの体となる風船には何がついているのか」私たちはセリフがあり、今何を貼っているのかがわかるが、風船を繋げる作業とセリフをいう同時進行が難しく、音声が届かないところや風船についている絵も子どもたちにしっかり伝えきれなかった所があると感じた。食育というテーマで準備を行ってきたため、あおむしの成長の過程を伝えるこの場面はとても重要である。しっかり伝

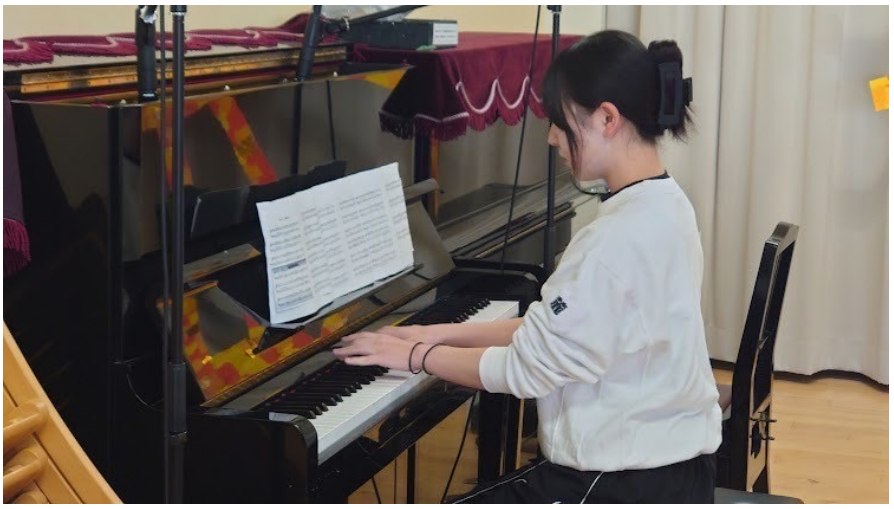
えるためにはどうしたらいいのかこの反省点を元に改めて考えた。作業とセリフの同時進行を改善するべく、子どもたちにしっかり声を届け、反応を受け取る「ナレーション担当」、反応を受け取りながら風船を繋げる「風船担当」を決めた。そして風船についている絵だけではなく他の食べ物にも反応できるようペープサートを用いて子どもの反応を物語に入れる「ペープサート担当」という中心となる3つの担当を考え、改善に取り組んだ。改善したあとの子どもたちの反応は自分が言ったことにナレーションが反応しあおむしさんに質問したり、ペープサートを動かし子どもたちの声が届いていることを示すことができたり、本番はより子どもたちに伝わりやすいように改善していけたのではないかと思った。録画したものを見るとカメラ担当した私はカメラの動きがカクカクしていて落ち着きがなかったり、画面に写っている学生が見切れてしまったりする時があった。セリフや動きがある学生は自分がどの立ち位置にいたらいいのかもう少し間を開けた方がいいなどを冷静に考えることができた。このようにカメラを通してわかることが多くあり、記録というものは次に繋げる重要なものであると感じた。

（執筆者：田尻結唯）

（4）音と音楽

　最初は、健康なあおむしが食事をする場面と蝶々を作る時のみBGMとしてピアノを演奏する予定だった。しかし、あおむしが偏った食事をする場面の時に、茶色の食べ物ばかり食べるあおむしと、好き嫌いなく食べるあおむし、2匹のあおむしの違いを音で表現したらどうかという意見がグループの中で出た。そのため、スライドホイッスルを使って音をつけ、あおむしが偏った食事をする場面は少し笑えるような場面になるように工夫をした。しかし、本番での子どもの様子を見ると、不健康なあおむしというイメージは子どもに伝えられていなかったようだった。なので、どうしたら違いを伝える事ができたのかをグループでもっと話し合うべきだったのではないかと感じた。また、幼教こども劇場の際に蝶々や果物を子どもたちがいる園に送る場面の繋ぎがうまくいかなかった。その反省を活かしどうすれば分かりやすくなるか話し合いを行ったところ、この場面でもスライドホイッスルを使い効果音をつける事で、本番ではうまく場面を繋げることができた。
　音響では、基本的に全体マイクで声を拾うようにしていた。しかし、ピアノの伴奏がつく場面や子どもたちとの掛け合いを特に大切にしたい場面では、全体マイクを使うと1番聞いてほしい言葉が他の音に混じってしまい子どもたち側からは聞き取りづらいのではないかと

感じた。そのため、ピアノの伴奏がつく時や子どもとの掛け合いを特に大切にしたい場面では個別のマイクに切り替える事で、子どもたちに声をはっきりと届けられる様に工夫を行なった。



（執筆者：大村いちか・麓あかり）

（5）　プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

プレ幼教子ども劇場を通した中での子ども達の様子を見て、最初はあおむしがどこに居るのかを一緒に探してくれたり、あおむしが不健康の方と健康での食べ物で何を食べているのかを子ども達と一緒に当ててみたりする中で子ども達も答えてくれました。ここでは、果物は健康的な食事で、お肉やチョコなどの茶色い食べ物は栄養が偏っており不健康な食事であるという意図を伝えたかった。しかし、子どもたちにはどの食べ物も蝶々に成長しており、綺麗な姿として受け取ってくれたようだ。食べ物が体を作っているという意図は伝わったけれど、健康と不健康という意図は伝わっていないようだった。『はらぺこあおむし』の曲に合わせる際も、ピアノの曲を聴きながらリズムにのっていたので、良かった。蝶々の台紙に貼る時に、ふたてに分かれて一人ひとり好きな食べ物それぞれちぎって貼っていたり、お友達同士でも楽しそうに貼る作業をしてくれたので、子ども達に対しての声かけなどもしやすかったのと、子ども達にとってもすごく分かりやすい劇だったと思う。子ども達の様子を見るにつれて、それぞれの園での子どもの様子や子ども達に対しての声かけの仕方で、どんな声かけをしたら子ども達に伝わるのかを考える事が出来た。

（執筆者：滝川あかり）

（6）取り組む過程での改善と工夫

まず最初に食育をテーマにして意見を出し合った。最初はダンボールなどを使い、あおむしの動きを真似して果物を食べる様子を表現し、体験させようということを考えていた。しかし、ダンボールの大きさや、園までの移動の際にダンボール同士がかさばってしまうため不便だと後に気がついた。そのため我々は他の食育方法について新たに意見を出し合った。次に出てきた案では、あおむしを風船で2匹作り、1匹は好きな物だけを食べるあおむし、もう1匹はバランスよく色んなものを食べるあおむしを作り、成長して蝶々になる際に綺麗な蝶々と見栄えの良くない蝶々をつくるという案であった。この案には、好きな物ばかり食べるのではなく色々なものを食べて元気な体になるということを伝えようという思いがあっ

た。実際に準備する点では、様々改善の工夫が必要となった。蝶々に貼る両面シートは値段が高く、たくさんは購入できなかったため、色んなものを代用して両面シートになるように工夫した。果物や食べ物は子どもにわかりやすいようそのままの形で量産させた。次に改善した点はプレ幼教こども劇場を行ったあとの事だ。プレの際に、机の下に隠れるだけだと頭が見えてしまうということが発覚したため、折り紙やダンボールや木などの材料を使い、地面を作りあおむしに割り箸やストローを付け、体制を低くせずとも頭が映らず、手で持ち続けずともあおむしが自立して立てるようにした。また、プレ幼教こども劇場では子どもの人数が12人ということだったため、貼りやすいよう果物をそのままの形で子どもに貼ってもらったが、本番では20人近くの子どもが居たため、園に届ける蝶々を2匹に増やし果物をちぎって貼るように改善した。

（小関理緒奈・壇葵）

（7）幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

本番での子どもたちの様子は、とてもよく私たちの問いかけに答えてくれた。
最初のあおむしが葉っぱに隠れている場面では「あおむしさんどこかな。」という問いかけに「ここにいるよ。」と指をさして教えてくれていた。「あおむしさんおはようございます。」と声をかけている子どももいた。あおむしが果物を食べる場面では一緒に歌を歌ってくれていた。あおむしが茶色の食べ物を食べる場面では、「あおむしさん何食べると思う」の問いかけに対して「いちご！」「オレンジ！」など、たくさんの食べ物を答えていた。蝶々の羽に果物を貼る場面では、果物を1つ1つ持ちカラフルに果物を貼っていた。完成すると「出来たよー」とカメラに写るように蝶々を持ち上げ見せていた。劇を進めることに集中して子どもの言葉に反応が出来ないところがあったため、子どもと会話をする人と劇を進める人を分けることで子どもの言葉に反応できるようにした。

（執筆者：宮崎菜々美）

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【大村いちか】
今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びは、準備の段階では様々な子どもの姿を想定して進めていく事の必要性と、子どもの前で行う本番では、実際に子どもたちとの対話を行いながら臨機応変に対応していく事の大切さである。準備の過程では、グループの皆で子どもたちの予想される姿について何度も話し合いを行ない、それを踏まえて準備を進めていっ

た。そのため、全体の流れや活動の内容はいいものができた様に思う。しかし、プレや本番で実際に子どもたちと対話しながら行うと、子どもたちの反応は予想していない反応も多く、対応がうまくできなかったり子どもの声を拾えていなかったりする場面があった。自分たちが準備の中で予想した子どもの姿以外の反応がある事も念頭においた上で本番に臨むとさらにいい発表ができたのではないかと感じた。

また、自分は音響を担当していたが、音量やマイクの切り替えで子どもたちにこちら側の声がしっかり聞こえるにはどうしたらいいか考えながら行なっていた。しかし、本番の後に映像を確認すると、あおむしが食事をする場面の時のあおむしの声が少し小さく聞き取りづらく感じた。一人ひとりの声の大きさなどにも気を配り、もっと細かく音量等を調整するとさらに良くなったのではないかと感じた。

【小関理緒奈】

今回幼教こども劇場を通して最大の学びは、子どもの予測不可能な行動に対して臨機応変に対応していくということだ。私は蝶々に折り紙を貼るための促し役をしていたが、プレの時も本番もどちらとも子どもたちの姿や人数や個性が違い、予想と遥かに違う回答が返ってくる時も度々あった。また、私達が作る茶色の蝶々は、好きなものばかりを食べすぎて汚い色になってしまったというコンセプトを元に作り上げたのだが、本番では子どもに綺麗だねと言う子どもが数名居た。このことから私は、ひとつの方面から見た予想だけではなく、多方面からの考えを注視して予想を重ね子どもの対応を考え臨機応変に対応していかなければならないのだと感じた。また、子どもたちの豊かな感性を否定するのではなく、受け入れて対応していくことも大事であるということを学んだ。今回幼教子ども劇場で経験したことを糧に今後の自分自身で行っていく保育活動に活かして行けるよう務めていきたいと思う。

【島田朱花】

今回の幼教こども劇場を通じて最大の学びは、子どもの言葉や表情に目を向け、表現を受け止めた応答的なやり取りをすることの大切さだ。準備の過程では、子どもの反応を想定しながら貼り絵の型紙や台本を考えた。中でも蝶々の貼り絵の準備では、あおむしが口にする食材や成長した蝶々の身体の色を「鮮やかな色は綺麗で健康的」「茶色は汚くて不健康」という学生が持つイメージを基に表現した。しかし実践で蝶々を見た子ども達は、学生の予想に反して「(鮮やかな色よりも)茶色の蝶々の方が綺麗」と口々にした。
このことから私は子ども達がもつ感性の豊かさと、表現は受け取る相手次第で変化する面白さを感じることができた。そして同時に、子ども達の感じ方を受け止めながら、こちらの想いを伝えることの難しさも知った。実践中は、練習の時に思い描いていたものとは違う形で遊びや物語が展開していくこともあった。しかし、子ども達は納得感を持ちながら楽しんでもらえたようで、学生も一緒に作っているという達成感を味わうことができ、完成した瞬間はお互いの心が通じ合ったように思えた。

これらのことから、子どもの姿に目を向けた応答的なやりとりの大切さを学んだ。また、伝えたい趣旨に合わせた遊びの展開や適切な言葉がけをする力を養うことが今後の課題となった。

【下津浦歌菜】

今回の実践で私が1番感じたことは子どものその時の反応によって臨機応変に言葉かけや所要時間を変えるとこが大切であることだ。

2匹目のあおむしの食べたいものを子どもたちに尋ねる場面では子ども達はお肉やチョコレートから予測して茶色の食べ物を食べていると気づいていた。実際に絵本で食べていたフルーツではなくコーラやお肉など茶色の食べ物をあげていた。「○○は嫌だ～○○がいい」というセリフは決まっていたが、子どもの言葉に合わせて「コーラもいいけどお肉食べたい」と言葉を変えて子どもたちと対話を行うことが出来た。

また、蝶々の模造紙に食べ物の画用紙を貼る時に1度目の実践の際は想像していたよりも貼ることがすぐに終わった。2度目の実践の前にメンバーと話し合い、食べ物の画用紙をビリビリと破り咀嚼を表現しようと案がでた。1度目の実践の経験を元に時間を調整し表現も更に工夫することができた。

実践までの準備の期間でもメンバー同士のコミュニケーションの大切さを学ぶことが出来た。ひとつのものを作り上げるためにメンバー同士の認識のすり合わせを定期的に行ったことが良かったなと省察して感じた。今回の経験を活かし今後の活動でも人との積極的なコミュニケーションは大切にしたい。

【高橋侑加】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、事前準備は早めに行い始めることの大切さと、画面越しでの子どもとの関わりの難しさについて学んだ。まず、事前準備は制作活動を行う為に自分達で下準備を作る事がとても大変だった。1つ1つ丁寧に作ることはとても時間が必要で、夜遅くまで残ってくれる仲間がいてチームメイトの有難みを知った。自分自身でも協力出来る所は積極的に参加した。制作を行う中、仲間とのコミュニケーションで新たなアイディアが生まれた。また、画面越しでの対応は、普段体験することのない物だった為、その場にいなくてもどの様にすれば子ども達が楽しめるのか、色々と工夫した。難しい所も多々あったが、チームの仲間と一緒に子どもの反応を予測してどのような対応をすれば良いのかを考え、実践する事が出来た。私は、あおむしの声の担当だった為、子ども達の声とナレーション担当の人の声をしっかりと聞くことに集中して取り組んだ。

【滝川あかり】

幼教子ども劇場を通して、製作では子ども達に見えやすい大きさだったり、どうしたらいいのかを話し合いが出来た。台詞でも、子ども達に伝わるようにどうしたらいいのかを考えてみたり、グループの反省会でも改善や製作も含めて最後まで諦めずに出来たので良かった。本番では、それぞれの園での子ども達の様子は違ったけれど、製作の作業ですごく楽しそうにしていたり、問いかけに対しても答えてくれてしやすかったです。はらぺこあおむしの劇は、不健康と健康の違いだったり、これを食べたら体の中はどうなるかを子ども達に伝えるのは、子ども達にとっても納得すると思うし、これから大きくなるにつれて食生活でも思い出すと思う。私も、はらぺこあおむしの劇をして不健康にならないように、食生活をもう一度振り返る事が出来た。子ども達に対しての声かけの仕方を、振り返る事ができた。最初は大変だったけれども、子ども達が喜んでいる所を見ると、最後の最後まで諦めずに出来たので、本当に良かったと感じている。良い経験だった。

【田尻結唯】

作業を進めていくうちに「絶対こうなるよね」「もしこうなったらどうする？」などと子どもたちの反応を考えながら計画を立てるが、このままでいいのかと不安な状態もありながら進めていった。緊張しながらも予想をしていたことよりもはるかに大きな反応をもらったり、予想通りだったりと行った園の子どもたちから様々な反応を得ることができた。今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びはいかに練習を繰り返し、見返すことが大事だと学んだ。「劇をしながら子どもたちのこういう反応を見ることができた」だけで終わらず、子どもたちの様子と私たちの動きを合わせたものをしっかり見返すと劇をしている最中で分からなかった部分がわかってよりよい改善方法を生み出せることができるなと感じた。カメラを使える練習も限られており、使えない時はスマホを使ってイメージをつくっていった。勉強も同じく復習が大事だが予習も大事であり、見返したからこその練習も今後の方向に重要だと学んだ。

【壇 葵】
　今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びは、幼教こども劇場に向けての打ち合わせや準備の重要性についてと、本番での画面越しの子どもたちとの関わりについてである。そこから、メンバーとの協調性やチームワークの重要性を学ぶことができた。幼教こども劇場の打ち合わせでは、毎回全員が集合するということは難しかったが、その分の情報共有や現状報告などがあったため、作業を進めやすい環境ができていたと思う。そのため、積極的に意見を出し合える雰囲気が生まれ、相手の意見を聞く、自分の意見を伝えるといったやり取りが活性化され、風通しの良いチームであったと感じる。このように今後現場にでたときにも、他職員とのコミュニケーションを大切にして協調性を高め合い、より良い雰囲気の中で子どもたちと過ごせる場を築きたい。また、実践の際の子どもの反応では、予想していなかった子どもたちの言動や行動に、上手く対応しきれない部分があった。予測不能な子どもたちの反応にも、即興で対応できるような技術を磨いていきたい。そして、子どもたちが楽しめるような場をつくりながら、且つ、意味を持った活動ができるよう意図をはっきりさせた丁寧な関わりをしていこうと思った。

【原田莉々子】
　『はらぺこあおむし』を題材にして食べたもので体が出来ていることを感じられるように工夫しながら実践した。プレでは風船の準備などに想像以上に時間がかかり、こどもの声を聞く余裕がなかった。話し合いをして役割分担をすることで、本番では余裕が生まれ、子どもの声を聞くことができた。このことから、子どもの言動や表情に気付き受け止めるためには、それだけの環境をつくっておくことが大切だと思った。また、子どもの表現に反応したり、言葉をかけることで、子どもも表現できることを学んだ。こども劇場を終えて台本通りにならないことの方が多いので、子どもの反応に合わせて、変えていけるようにしたいと感じた。最後の最後まで、より良くするために話し合い、こども劇場を終えることができて良かったと思う。今回学んだことをこれから保育の現場でも活かして、様々なあそびを展開していきたい。

【麓あかり】
　子ども劇場を通しての最大の学びは、3つある。まず1つ目は、グループで協力する力、2つ目は早めの段階から準備を行うこと、3つ目は、何度も練習を行うことの3つである。
　まず1つ目のグループでの協力する力では、はらぺこあおむしのグループの中でも、細かなグループに分かれ、この少人数で協力して作業を行った。私は、ピアノ担当で1人だったが、他のグループを見ていると、『 はらぺこあおむし 』をどうやって面白く表現するか、何を買うのか、セリフ等、1人では考えず、仲間と協力しながら、納得するまで話し合いを何回を行い、行動に移している姿を見ていた。その甲斐があり、こども劇場本番では、あまり失敗すること無く、みんなが納得するような形で終えることが出来た。
 次に2つ目の早めの段階から準備を行う。では、本番で失敗しない為と、本番でこれが無いとならないように、早めに準備を行った。早めに準備を行った為、準備物が足りなかったりせずに余裕を持って本番に取り組む事が出来た。
　次に3つ目の何度も練習を行う。では、道具の動かし方、セリフや動作、ピアノを特に、授業外でも、練習を行った。その甲斐があり、本番では、あまり失敗すること無く、無事に終えることが出来た。何度も練習をしなければ、セリフを忘れてあたふたしてしまったり、ピアノの音を間違えて、落ち込んだりせずに済む。また、このあたふたしている姿をみた、子ども達を不安にさせることは絶対にあっては行けないことだ。その為、しっかりと練習を行い、本番に備えなければいけないと思った。このしっかり練習するということが、特にとても学びを得た。
　まとめて、この3つの事が、私の中では最大の学びであった。

【宮﨑菜々美】
　今回の幼教子ども劇場を通じて最大の学びは画面を通しての子どもとの関わりだ。『はらぺこあおむし』を通して食育の大切さをどのように伝えるのかをグループと話し合った。あおむしの体を風船で表しあおむしの体を繋げる役割を担当した。プレでは船を持って行っていたが画面を通してだと見えにくくなっていることに気づき、本番は風船に持ち手をつけ机の下に隠れてあおむしの体を繋げるようにした。劇を進めることに集中して子どもの問いかけに反応することがとても難しかった。子どもがどのような反応をするのか事前に考え練習をする際も子どもが見ていることを想定することで本番は余裕を持って子どもと関わることが出来ると学んだ。

【吉武M】
　今回の幼教こども劇場で学んだ事は、仲間とコミュニケーションをとりながら、意識の共有、意思疎通を図ることの大切さだ。リモートという画面越しでの子ども達との関わりの中でどのような内容にすれば子ども達に伝わりやすいか、どのような声掛けをしたら理解してもらえるか、楽しんでもらえるかを仲間と話し合い、それを形にしていった。それぞれのアイデアや様々な視点での考えを話し合いの場で出す中で、私個人では考えつかなかったり、気付けなかったりするアイデアや保育の引き出しをたくさん得たと感じる。
　また、念入りに準備したつもりでも子ども達の反応や行動が想像に反した時に、一人では対応出来ない事が仲間がいることで助け合ったりして、臨機応変な対応が出来ると感じた。保育をする上で決して一人ではできない事、周りの支えや協力があってこそ、子ども達により良い保育を行うことが出来るのだと学んだ。その中で、こちらの意図に対して子ども達の反応や行動が異なったとしても子ども達が楽しかったと思える時間になればそれでいいのではないかと感じた体験となった。